

# 校長室から

校長室だより 第3号  
令和元(2019)年10月23日発行  
文責 宮城県古川工業高等学校  
校長 佐藤 誠



10月22日の新聞朝刊記事によると、台風19号により全国で死者83人、行方不明者11人、宮城県でも19人の方が亡くなり1人が行方不明という。鹿島台や丸森を始め、県内各地で東日本大震災の後を連想させるような被害の光景を目にする。あらためまして、お亡くなりになった方に哀悼の誠を捧げますとともに、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。

さて、前回第2号の発行からまだ日が経っていないが、今回は本校生徒諸君に向けての提案をしたいと考え、第3号を作成・発行することとしました。

## ○ 「ボランティアのすすめ ～ “友だち・ご近所へのおてつだい” から “世の中へのおてつだい” まで～」

TVのニュース報道や新聞記事等では、各地の被害の状況と復旧の様子が随時報告されている。その中で、取材者・被災者がともに多くコメントしているのが「人手が足りない」というものだ。

平成23年の東日本大震災の発災後に、どれだけの時間と労力をかけて現在に至っているのかを思い返すと、今回の台風被害も家屋と地域が復旧し、居住する方の生活の安定までたどり着くのにどれだけの作業と時間を要するか、想像するだけでも大変なものを感じている。

さてそこで、生徒諸君への提案です。皆さんの「手」と「力」と「元気」を、今困っている人たちのために提供してはどうだろう。本校の中にも、実際に浸水被害に遭った生徒もいる。本校生徒でなくても、もしかしたら中学校の同級生、あるいは親戚、ご近所の方など知り合いで被災され困っている方がいるかもしれない。その方たちへ何らかのお手伝いできることがあるのではないかと。また、たとえ自分に関係する人や地域でなくても、現在、各地で災害ボランティアセンターが立ち上がり、ボランティアに参加してくれる多くの「人手」を求めている、ボランティア登録受付をして災害ボランティアの活動に参加することができる。皆さんの積極的な参加を期待したい。

自分の経験を少し紹介する。昨年7月の西日本豪雨で九州・中国・四国地方に大きな被害があった。1ヶ月がたってもまだ復旧活動が進んでいないという報道を聞き、思い立って家族を連れて広島県で災害ボランティアに参加することにした。8月のお盆時期だったので、県外ボランティアを受け入れていたのは呉市だけで、事前に仙台市社会福祉協議会でボランティア登録を済ませてから広島に向かい、8月15日の1日だけ活動に参加した。現地の災害ボランティアセンターで受付後に10人ほどのグループに分けられ、当日のスケジュールや注意点を説明された後、担当者の車に分乗して現地に向かい、民家の床下の泥の掻き出しを行った。

作業は単純で、すでに家財と畳を運び出してむき出しになった床板をはずして、その下にたまっている泥をスコップで土嚢袋に詰めて、外に運び出すというものだった。泥は床下いっぱい厚さ30センチ位までたまっていて、あとはただひたすらに作業に打ち込むだけだった。自分は主に泥の袋詰め作業、家族は運び出し作業を担当した。担当スタッフ入れて15人が、昼休みを挟んで4時間程作業したが、平屋家屋の1階床下の約1/4の泥を掻き出してその日は終了となった。

ちなみに、この作業を行ったのは豪雨被害に遭ってから1ヶ月以上後のことである。それまでの時間に、地域の道路復旧、家財道具や畳の片付けなど、やるべきことは山ほどもあって、やっとこの作業にたどり着いたのだという。この泥の掻き出しはあと3日はかかると担当者は話していた。

さて、なぜ長々と自分の経験を書いたかということ、復旧には莫大な時間と労力が必要なのだということ、現実感を持って理解して欲しいと考えたからだ。たとえ1軒の家でも、さまざまな復旧作業があり、たくさんの人手を必要とする。それが集落全体となれば、さらにである。

生徒の皆さんには日々取り組むべきことがたくさんあることは、十二分に承知している。その上であえて、可能なら皆さんの力を誰かのため、地域のために貸してもらいたい、と呼びかけている。

ただし、決して強制しているわけではないので、自分に出来る範囲があればかまわない。もし今が難しいなら、タイミングが来たときでもかまわない。困った人への支援のやり方も、災害ボランティアへの参加だけでなくさまざまなものがあるだろう。“友だち・ご近所へのおてつだい” から “世の中へのおてつだい” まで、自分にできることを見つけてぜひ取り組んでみてください。

最後に、もし災害ボランティアの活動に参加する場合は、事前に各市町の社会福祉協議会や災害ボランティアセンターのHP等で受入情報や持参物を確認してから出かけましょう。